

202011 口語詩句選評 龍秀美

つぶやきの延長上に見える投稿も多いが、その中に新鮮なものをみつけることができる。今月は日常の些細なことでこれまでに無かった視点や、生活感情の中での新鮮な取り合わせを多く選んでみた。

だいすきだよパパ
だいすきだよママ
ぼくはぶたれるぼくが
きらいなだけ

作者 宇井 麻千（大阪府）

——虐待を受ける子どもの心の叫びを端的に表現。

犬猫に
ぬくもり求め
秋の夜
うるせえこれがホントに
幸せなんだ

作者 佐々木みつる（東京都）

——ええじゃないか、ええじゃないか踊りのような犬猫ブーム。

日常に回帰した
だがかかりそめの
暮らしに感じる

花が枯れていた

作者 加藤 美紀（愛知県）

——コロナ禍の宣言が緩和されて一応戻った日常でも、感性は変容してしまって二度とは戻らない。

この猫の顔が
夫に似ているのには
訳がある

作者 板倉萌（兵庫県）

——選ぶということの自由とその不可解。いや選ばれたのか？

マヨネーズを逆さに戻したって

明日生きてないかしらん

作者 ヒロミヤカザル（京都府）

——日常の習慣的な動作で世界はできている。

定義された言葉で話しましょう

我々はわかりあうことができます

作者 桐口鈴汰（北海道）

——言葉が「定義」されればその力の大部分を失うだろう。

海へ行って

かもめのこわい顔を見る

作者 春町 美月（大阪府）

——海、かもめという演歌・意識の記号を壊す。

Wi-Fi を振り切りながら春霞

作者 高良真実（東京都）

——文化の巨大な伝統を持つ季語と、もう一つの現代の霞とのせめぎ合い。

うたたねの

猫がしっぽで

返事する

作者 桜咲（千葉県）

——とにかく、可愛い！

始発電車から見えた病院の明かり

看護師が廊下を走っていた

作者 宇井 麻千（大阪府）

——何も言えない。感謝あるのみ。

回転扉のように

一時的に人を閉じ込めて

みんなあなたから

すり抜けていく

作者 花澤 希海（千葉県）

——目の前に見えるだけに掴めるかと思ったとたん、すり抜けていくものを茫然と見るだけ。残酷な閉塞のシステム。

花よりも果実の重さ 三島の忌

作者 鈴木四季（群馬県）

——花という異次元の虚構か行動という重さか。おそらく拮抗している。

荒れ狂う風よ

さらに強く荒れ狂え

自転車カバーだけは残して

作者 風船（東京都）

——シュトルム・ウント・ドラング。いいから自転車カバーは持っていかないで。

もうみんな

忘れてしまいました、と海

作者 門野あおい（東京都）

——自然は無常で非情で無意志。海は特に。